

動物園における動物との接触体験を通して子どもは何を語るのか? (その3)：自然界への情緒的なつながりと 偶然性による自由な学習の意味

What do children speak of through their experiences of contact with animals in zoos? (No. 3): Implications for a child's emotional connection to the natural world shaped by contact with animals, and for freestyle learning through serendipitous experiences in zoos

大橋 淳子 (OHASHI Junko)

名古屋市役所

City of Nagoya, 3-1-1 Sannnomaru, Naka-ku, Nagoya, Aichi 460-8508, Japan

概要

本研究では、動物園での動物との接触体験が子どもにもたらす内的な意味を、1組の母子の振り返りの語りから質的研究手法を用いて検討した。その結果、本事例では、都市での動物との接触が、動物と共に在る感覚や動物との情動的な同一化を子どもにもたらしたと考えられた。同時に、その環境が、動物のインプリントィングと同様の仕組みで、動物への家族的感覚の形成を子どもに促したと示唆された。この家族的感覚は、動物が生息空間内で見せるものと類似しており、これらのこととは、動物との接触体験が、自然界への子どもの情緒的なつながりの形成に、どのように関わるのかを検討する際の手がかりになると考えられる。また、本事例の子どもは、各々の動物が保有する色や形態の特異性を一体一体探し出して楽しむという、動物を個としてとらえる姿勢を示したが、それは、子どもの好んだ、偶然を楽しむ自由な学習の中から生まれていた。このことから、動物園が学校とは異なるパラダイムの中に位置していることや、学校からの動物園訪問時では、偶然性や自由性をより尊重すべきであることが示唆される。

キーワード：動物と共に在る感覚・インプリントィング・動物への家族的感覚・質的研究

Abstract

This study, employing a qualitative research method, explores the internal meanings derived from a child's experiences of animal contact at zoos, based on reflective narratives from a mother-child pair. The findings suggest that, in this present study, contact with animals in an urban setting fostered emotional identification with animals, as well as a sense of co-existence with them. Furthermore, the environment was thought to promote the formation of a familial sense toward animals in the child, through a mechanism similar to imprinting observed in animals. This familial sense toward animals observed in the child appeared to resemble behaviours seen in animals within their natural habitats, offering insights into how emotional connections to the natural world may form in children. Additionally, the child demonstrated an approach of perceiving each animal as an individual, taking pleasure in discovering the unique colours and forms of each one. This perspective emerged from her self-directed learning style, characterized by spontaneity and the enjoyment of the unexpected. These findings sug-

gest that zoos operate within a different paradigm from that of formal educational institutions. Accordingly, during school visits to zoos, greater emphasis should be placed on fostering spontaneity, contingency, and freedom in children's learning experiences.

Keywords: being together with animals, imprinting, familial sense towards animals, qualitative research method

1 問題の所在

1.1 博物館の役割 —社会的相互作用と自由な選択の学習—

都市部の人口が増加する現在では、自然に親しみ自然を理解する機会の提供が重要である。自然系博物館である動物園、植物園、科学館は、学びと遊びを提供する社会教育施設であり、その多くは都市部やその周辺に位置し、都市生活者にとって自然と関わるためのひとつの入門的な環境を提供している。動物園の来園者は、ベビーカー利用の30代親子連れと、女性が多く（京都市動物園、2018）、また、小学生以下の子どもをもつ親へのアンケート結果では、親子での動物園来園経験は87%である（アクトインディ株式会社、2022）。

なお、本論文で用いる「博物館」は、博物館法の規定を受けるすべての種類の博物館（広義の博物館）を指し、博物館の分類は、文部省告示第164号 公立博物館の設置及び運営に関する基準（昭和48年：文部省、1973）により、総合博物館（人文科学と自然科学の両分野）、人文系博物館（考古、歴史、民俗、造形美術など）、自然系博物館（動物、植物、水族、科学技術など）とする。

社会教育施設の役割について小川（2019）は、博物館資料の活用で科学教育の一層の充実が図れるとして、具体的には、議論や検証を探求する活動での証拠に基づく実践、現代生活が抱える諸問題への思考の深化、他者との対話による意思決定過程での学び、生涯学習の意欲や姿勢への基本的な態度の獲得などをあげている。いっぽう、博物館での体験は、来館者と展示物あるいは、来館者同士の相互対話が生み出す社会的な経験であり、自由でレジャーを伴う日常的な生涯学習であるという主張もある。Blud（1990）は、学習は個人の問題解決と情報処理の観点から認識されるが、カジュアルで自由な選択が好まれる非公式な学習環境である博物館では、あらゆる学習が個人的な経験としてではなく社会的な経験として得られ、来館者同士の相互作用は、来館者と展示物との相互作用と同じくらい重要なと述べている。Massarani *et al.* (2021)も、宇宙博物館を訪れた10家族の行動とその会話の分析から、来館者は、文化的知識や日常の経験を駆使してより複雑なテーマの文脈化をしたり、経験、アイデア、知識、概念などの共有で対話の発展を行ったりしているとし、この博物館体験が家庭での宇宙に関する会話を増加させる受け皿となり、彼らの宇宙への意識を豊かにさせると述べている。また、Falk and Dierking (2000)は、社会教育施設での学習は、テレビを見ること、新聞を読むこと、友達と話すこと、演劇を見に行くこと、ネットサーフィンをすることなどで得られる学習と同様、個人的な動機に基づく自由な選択の学習（free-choice learning）であると述べている。さらに、自由選択学習の将来性について「情報取得への欲求に合致した学習で、ステレオタイプの学習ではなく誰もがつなに行う必要のあるもの（従来のような、必要だが苦痛を伴うプロセスで思春期に卒業するものとは異なるもの）として、人々に受け入れられることになる」「経済の基盤がサービスから経験や知識へ移行するにつれて、社会の価値を形成する中核になり新しい学習社会での基本的基盤になる」と述べている。

1.2 博物館体験の先行研究 —学習が来館者に与える影響—

さて、このような博物館施設での来館者の体験とは何だろうか。体験の即時的な学習効果の側面から、Oliveira & Barba (2018)は、スマートフォンを利用したパーソナルガイドの提供が博物館資源の活用に有

効であると述べている。その理由について、自由な学習場所である博物館では、貴重なコレクションと意図された設計空間の中で、学習が「偶然」に起こり、自律的な体験が提供されることに加え、来館者の学習目標は、習得（特定トピックの詳細な追究）、成果（より多くの学習）、快楽（楽しみ、受動的な喜びの追求）、社会性（他者との経験の共有）など各々異なるため、個人化された学習ガイドの提供が重要になるからだと説明している。

いっぽうで、博物館体験を来館者の内面変化（短期的なものに加え、その後の生活の中で体験の意味が変化していくような長期的なものも含む）という学習効果に注目し研究した論文もある。大野（2022）は、博物館のワークショップで学習の深まりに関与する「内省」（学習者が自分の学習内容を判断し、望ましい学習内容との間の矛盾を発見して自ら改善すること）に着目し、単発ワークショップでも、内省の促し、自己効力感、スキルやモチベーションの向上、高い課題志向の追求と達成を参加者にもたらすことを確認している。また緒方（2022）は、博物館のもつ心理・生理的なリラックス効果に注目し、メンタルヘルス対策としての博物館利用の可能性を示すなど、その癒し効果を論じている。さらに、Eklund（2020）は、博物館体験は個人的なものではなく来館者同士の関わりの中で生じる体験であること、来館者たちが展示と対面した時に行う社会的意味形成（悪ふざけや議論、知識の共有など）によって、展示物はかれらの中で再文脈化されること、過去にリンクできる展示物が、現在の社会的環境の肯定や博物館でのグループのアイデンティティの確立作業に関わっていることを論じている。そして、スウェーデンの歴史博物館でZ世代の複数の大学生グループが注目した、展示物（1600年代と1800年代の元学生による2冊のノート）とかれらとの対話を例としてとりあげている。それによると、大学生らは、ノートに隙間なく書かれた大量の手書き文字に驚嘆したり、それを現在のデジタル機器上のノート方法と比較したり、1600年代の学習での使用言語（スウェーデン語かラテン語か？）を推測したりして、当時の学生生活を話し合いながら、ともに学生として、その価値や生活の共通点、現在それを定義しているものについて再確認していたという。

このように、博物館での体験による来館者の短期的・長期的な内面の変化に焦点化して博物館体験をとらえようとする研究は行われている。本研究はそのような研究的文脈を踏まえつつ、博物館での体験が来館者に与える影響を体験直後に見られるものに限定せずに広くとらえ、体験者が何を感じそれをどのようにとらえているのか、そしてそれがかれらにどのような効果を与えるのかという、体験の意味の解明に努める。

本研究の特徴は、動物園に特化し、子どもを対象とし、母親に促された子どもの発話から、動物園での動物との接触体験が子どもに与える影響と動物園の社会的役割について、同時に検討する点である。

2 本研究の目的

本研究は、動物園の主たる来園者である「子ども」とその「保護者」に焦点を当て、動物との接触体験が当事者に与える影響と、動物園の社会的役割について、動物園での体験についての親子の振り返りの語りを分析して、探索的に明らかにすることを目的とする。

さて、本研究で、博物館のうち自然系博物館である動物園での体験を扱う理由を述べる。1つは、筆者が学芸員資格を持ち18年の動植物園勤務経験を有し、対象となる動物園をよく知っていることである。もう1つは、動物園での体験が、美術館などの人文系博物館とは異なり生きた動物の展示によりもたらされることである。展示は何かを与え、それが「体験」と絡みあうことで記憶されやすくなる。動物園の、半自然環境での動物の展示は教材化された（教えるために整えられた）ものとの認識がされにくく、展示（教材）と体験がより自然な形で絡みあい記憶されやすくなると考えられる。これらから、子どもの視座を借り博物館体験の現象（意味）の探究を試みる本研究の場として、動物園は妥当である

と判断した。

これまでの研究（大橋, 2017, 2025）では、動物が子どもの心理的状態の投影対象になること、動物を媒介して家族の意味を理解すること、そして、動物園体験がコーピングとして機能することを明らかにした。これらを踏まえ、「学習」と共に、「自己投影」や「自己認知」、「家族の意味」、「コーピング」を分析の概念とする。

なお、本論文中で用いる「接触体験」とは、これまで通り、見ること、聞くこと、触れること、感じることのすべての体験であり、しかも意図的であるか無意図的であるかを問わない。したがって、たとえば、来園者に自然と伝わる動物の鳴き声やおいに関する体験も含んでいる。

以下は、研究倫理に対する慎重な配慮に基づいて計画した上で、名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理規定に基づく研究倫理審査を経て実施した（審査承認番号 16-795）。

3 本研究の方法

3.1 本研究の研究参加者

本研究の研究参加者は、C児（小学5年女子児童）とその母親C（C母）である。地域性や家庭環境が子どもの発話に影響を与える可能性を考慮し、大橋（2017, 2025）とは異なる条件（訪問した動物園の所在都市（人口約230万人）以外に居住、母親が非フルタイム労働者）で選定した。C母は筆者の学生時代から（30年以上）の知人であり、C児は筆者とは面識がない。C母はパートタイム労働者で週3回（2時間／回）の勤務と毎週末に自宅で通信添削の仕事をしている。なお、研究参加者が筆者の長年の知人とその女子児童であることは、C児との信頼関係の構築のしやすさ、および筆者自身が女子児童の親であることの利点（女子のほうが児童の生活的背景についての認識が幅広いこと）を、大橋（2017, 2025）と同様に考慮したためである。

つぎに、親子で体験を振り返ることの意義について記す。子どもに意見を求める場合に重要なのは、子どもの背景や特性に合わせた配慮である。このため、子どもと一般の人をつなぐ「仲介者・翻訳者」の役割（ファシリテーター）が必要となる（こども家庭庁, 2023）が、本研究ではこの役割を母親が担い、C児と筆者をつないでいる。また、幼い子どもにとって母親の声は特別であり、ストレスの抑制や社会的絆の深化（Seltzer *et al.*, 2010）をはじめ、肯定的な感情反応の誘発、注意喚起、発話、感情処理（Dehaene-Lambertz *et al.*, 2010）に影響を与えるとされる。さらに、Abrams *et al.* (2016)は子ども（平均11.2歳）を対象とした研究で、母親の声は精神的な安らぎと社会的学習の根底をなしており、子どもの脳内には母親の声で選択的に活性化する回路があり、幅広い領域（聴覚処理、言語処理、報酬中枢、感情処理）で脳が活性化されることを明らかにしている。なお、母親が子どもに語りかけて動物園での体験を振り返ることは、日常の中でのデータ採取を可能にし、研究の生態学的妥当性（ecological validity）その理論が現実の文化的意味のある状況で人々の行為を説明できるかどうか（Neisser, 1976）を高めると考えられる。じっさい大橋（2017）では、母親は、子どもと語り合うことで、子どもの内面に潜む「語られない語り」（井上, 2015）の存在を把握していたり、それを通じた親子間のコミュニケーションの深まりを感じていたりしていた。これらを考慮し、動物園での接触体験を母子で語り合う形で行うデータ採取が、研究目的に照らして妥当な方法だと判断した。

研究参加者であるC児の年齢（11歳）は、以下に基づき、精神的な面や学習および思考、認知能力、そして親子で動物園を訪れる年齢上限を考慮し、研究参加者として妥当であると判断した。①自伝的（あるいは自己）記憶での、出来事の具体的な場所と時間の特定、豊かな詳細描写による経験の生々しい表現、人物の行動特定について、11歳までにはその要素の4分の3を自分の語りの中に含められるようになる（無藤, 2004a, b）こと；②子どもの行動面や精神面における自立の開始時期が小学校中学年から

とされる（田中, 2009）こと；③小学校高学年の学習課題の高度化（抽象的思考能力、より高度な会話や作文能力、遠近法による描画など）およびこれらの課題克服に対する子どもの分水嶺が9歳ごろ（「9歳の壁」）である（子安, 2011）こと；④現実を可能性の1つと見る抽象的思考および言語を用いた論理的思考の発達が11歳ごろである（藤村, 2011）こと。

本研究では、子どもが誘導や暗示にかかりやすいことや精神的な負担を受けやすいことを考慮して、大橋（2017）で論じた有効な回避策である、司法面接に詳しい心理学者の田中（2006）による正確な証言を得るために子どもへのインタビュー方法、①誘導的な質問をしない、②誘導を受けやすい権威のある人物を聴取者としない、③予期や思い込みなどの認知的枠組みをもって質問しない、④オープンな質問だけをしない（事実を思い出させる手がかりとなるような質問も必要である）、⑤同じ質問を繰り返さない、に依拠して実施した。

C児の居住地は、人口約40万人で、調査を行った動物園から約25 km離れた繊維産業を基盤とした都市である。C児は、両親および3歳離れた妹と戸建て住宅に住んでいる。C児とC母は幼少期（2歳ごろ）から動物園を訪問し、その回数は多い（帰省時に祖父母と頻繁に動物園を訪問）。C児はインコと川で見つけたエビ、キンギョを飼育中で、カナヘビ、ヤモリを飼育したこともある。また、小学校3年生の時にビオトープの会（月に2回程度参加）に入り、川から生き物をすくって観察したり、持ち帰って飼ったりしている。それ以来、C児は水辺の動物が好きになっている。C児は、身近にいる昆虫や魚などにも興味があり、近くの川で父親と魚やカニを捕ったり、キャンプ場でカブトムシのわなを仕掛けたりしている。

なお、C児の性格は、ゆったりとしてこだわりがなく（C児「ゆったりしてる」「（キャンプなどの）役割（分担）で、ああいいよ（と引き受ける）」）、しかし、負けたくない分野があると堅い意志でやり遂げ（C児「ピアノが、あったら絶対」「負けたくない」）、そして、他人を思いやる共感力がある（C母「お世話好きというか、ちょっと困っている人とか、ちょっとちょっとしんどいなあっていう人のお世話、自分も大好きで、いろいろそういうことのお世話をよくしてて」）。

3.2 研究方法

本研究で明らかにしようとするものは、主観的かつ間主観的内容であるため、量的で客観的な測定が困難なことから、質的研究手法（多様で複雑な体験への理解を深めることのできるアプローチ：谷津, 2017）を用いる。親子の経験に内在する世界は、実験的な実証可能性と再現性を求めるべき性質のものではない。それはその人たちのありのままの世界を分析することで明らかになるとを考えている。哲学者の西田は、「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掘ることに依つて最も深い哲學が生まれるのである」と記し（西田, 1937）、日常生活での自身の経験を深く掘り下げることであらわれるものの重要性を説いており、隨筆家の若松も「自分とは何か」を知るために、多くの情報を集める（水平的に拡散する）のではなく、自分を垂直的に深く見つめることが必要であると述べている（若松, 2019）。これらは哲学の分野での論述であるが、研究参加者が1組の親子の語りあいの中に潜む当事者にとっての意味を見出そうとする、本研究のアプローチの意義を示唆するものと考えることができる。

さて、本研究のパラダイムは、社会的構成主義（Social Constructionism 真実は実在するのではなく人の営みによって社会的に構成され、それがまた社会的に認識されると考える：大谷, 2019）に基づく解釈的アプローチ（客観的な真実は存在せず、それは人の解釈によって生まれるという考え方：大谷, 2019）に依拠する。その理由は次のとおりである。①現象（意味）は人とモノ（体験、動物、人）との相互作用によって構築される。②人間と動物の関係性は、人間の行為により社会的に構成されたもの（捕食、家畜、ペットなど）であることから、本研究における子どもの動物との接触体験もそれに規定され

る側面がある。③動物との接触体験について子どもがどのように意味を構築しているのかを重視し、「主観的な現実」の構築の理解という側面からアプローチする必要がある。

なお、質的研究では「厚い記述（濃密な記述 thick description）」が重要となるため、それに努める。厚い記述は、多量のデータ引用のことではなく、情報が文化的なコンテキストの中で解釈されるためのものである（サンデロウスキー, 1994）。

3.3 データ採取

訪問した動物園は、植物園を併設した義務教育児童の入園が無料の公の施設で、人口約230万の都市にある。親子による動物園訪問は、201X年Y月14時から16時45分（滞在時間は2時間45分）で、途中、にわか雨にあったが休憩せずに動物園の中を歩き回った。C児に疲れた様子は見られず「また来ようね」「今度は植物園にも」と発言し、退園を促す音楽の間も爬虫類を観察した。C児は、観察したほとんどの動物をスマートフォンで動画撮影した。親子とも動物園には1年ぶりの来園だが、この動物園の年間パスポートを持ちたいと考えていた。なお、この親子の動物園訪問には、親子の会話を深く理解するために、また分析の妥当性を高めるために筆者も同行した。ただし、来園時の観賞動物の決定には、筆者は一切関与しなかった。親子が見学した動物や園内施設は次のとおりである。（ ）内は観察時の動物の様子とC児の行動、「 」内はC児の発話である。インドサイ、アジアゾウ（鼻でじゃれあったり、足を曲げたり横になったりしている）、コツメカワウソ、フラミング（「エサで羽が着色する」）、ライオン（ライオン舎から離れた後、ライオンの鳴き声が聞こえる）、シマウマ（「色が白くない」）、ペンギン（頭部の金色の冠羽が特徴のイワトビペンギンを気に入った様子）、アザラシ（泳ぎ方を長い間観察）、アシカ、ホッキョクグマ、キリン（「キリンの角は5本ある」）、インコ類（多数の種類をくまなく観察）、コアラ（枝の上をゆっくり動いている）、バードホール、アフリカゾウ（鼻から口へ水を運んで飲んでいる。「耳が大きい」）、オランウータン（雨の中、屋外に出て縄で遊んでいる）、ゴリラ（人気のゴリラを室内で間近に観察したが、興味のない様子）、チンパンジー、ゾウガメ（ハンズオン展示に触り展示の中に入りたがる）、自然動物館（爬虫類の展示空間でサンショウウオ、ワニ、ヘビなどを30分程度観察。ここを非常に気に入る）、アメリカバイソン、プレーリードッグ（ちょこちょこと動き回る姿を気に入る）。

インタビューは、動物園訪問から約1か月半後に、C児の自宅で約1時間30分間（休憩なし）行われた。インタビューを動物園訪問の直後に行っていないが、心理学者のHoweの「記憶とは体験の真実の記録再現ではなく、過去の出来事のうち自分が注目し重要とみなした断片的な残りから、現在の世界観に従った『出来事の再構築』である」という定義（Howe, 2022）を参照すれば、現在から過去の動物園体験を語る内容は、その子どもの体験の意義（意味）を表しており、本研究の目的に照らし合わせてもこの時期はむしろ妥当であると考える。

インタビューは、インタビュアーである筆者が動物園の訪問日時や滞在時間を述べた後、最初に立ち止まって観察したアジアゾウたちの様子について説明し、「（アジアゾウについて）何か思ったことはありましたか？」という問い合わせで始められた。その後、筆者は、親子が語り合うように会話を促した。インタビューは、つねに和やかで笑いのあふれる雰囲気の中で行われた。話の最中、ペットのインコの声（おしゃべり）が多く聞こえた。なお、筆者は、聞き取り時の話題の選択は一切行わず、すべて親子の自発性に任せて行われた。

インタビューは研究参加者の同意を得て録音され、逐語記録化された。全体の文字数は25,013文字、C児の発言数と文字数はそれぞれ522回6,147文字、C母のそれは535回10,383文字、インタビュアーのそれは389回8,640文字である。これらのほとんどが動物に関する話題だった（動物の話題22,800文字、学校の話題1,455文字、その他758文字）。全体の大まかな話題の遷移は次のとおりである。アジアゾウ

→ペットのインコ→爬虫類（主にヘビ）→地元で参加した自然観察会（ビオトープ）→爬虫類→両生類→靈長類→フラミンゴ→プレーリードッグ→フェネック→ペットのインコ→アザラシ→ペンギン→コツメカワウソ→ペットのインコ→学校生活。以下では、アジアゾウとペットのインコの話題（全体の29%。C児の発言数と文字数はそれぞれ156回1,874文字、C母は159回3,125文字、インタビュアーは121回2,450字）、および爬虫類に関する話題（全体の21%。C児の発言数と文字数はそれぞれ150回2,045文字、C母は121回2,158文字、インタビュアーは78回1,206文字）を中心に分析を行う。

3.4 データ分析

データの分析には、小規模なデータ分析にも有効で深い解釈学的分析が行える質的データ分析手法SCAT（Steps for Coding and Theorization）（大谷、2008, 2011, 2019）を用いた。SCATでは4つの段階ごとに「コード」を付して構成概念を構築し、それに基づくストーリーラインを記述して理論化を行う。SCATは、本論文執筆時点では、国際誌掲載英文論文101件、博士論文47件、修士論文51件を含んだ多様な研究機関の多様な領域の研究1,010件ほどで利用されており、国際的に評価を得ている質的データ分析手法と判断できる。

4 親子（C児とC母）の分析結果と考察

4.1 動物の存在を通じた家族の意味の理解

多くの来園者は、アジアゾウが座っていたり鼻でじゃれ合っていたりする姿に見入っていたが、C児の語りはゾウのこれらの動きではなく、ゾウ同士の関係性への疑問についてである（表1、SCATによる分析^{*1}）。なお、アジアゾウ舎には、スリランカから来たゾウの親子3頭（母親ゾウ、父親ゾウ、子ゾウ）とインドから来たゾウ1頭があり、観察時の様子は、母親ゾウは子ゾウと離れて父親ゾウと鼻でじゃれ合っていた。子ゾウ（3歳）とインドから来たゾウ（推定44歳）も柵越しにじゃれ合っており、子ゾウは片足をまげたり横になったりしていた。C児は次のように語り会話を続く。「不思議だなあって思った」「インドから来たゾウと、（スリランカから来たゾウを両親にもつ子ゾウとが）なんであんなに仲がいいんだろうなあって思った」「なんで仲良くなっているのかなあつと思って」。インタビュアーが、子ゾウの生育環境（両親とインドから来たアジアゾウ1頭と同居）から家族みたいな感じなのかもしれないと説明すると、C母は「うん、生まれた時に、からいるという（ママ）」と言い、C児も「（C母の発言と重なって）生まれた時にいるから」と言う。そして、その後C母は「うん、うん、そのファミリーというか」と発言する。

動物園での動物との接触体験そのものではないが、そのいわば参照枠として、C児の家で飼っているペットのインコについての多くの語りもここで取り上げる。インタビュー中の、ヒナから育てたインコの頻繁なおしゃべりに関する次の会話がそれで、インコと母子との関係性を反映したものである。C児が「（インコは）毎日しゃべってる」「ケージの隅っこでね、練習してる」「（誰にしゃべるのかとの問い合わせ）うん、みんなにしゃべる」と語り、C母は「ああ、家族にね」と応答する。そしてC児が「（インタビュー中に聞こえるインコの声について）真似してる。なんかみんな（インタビューで）しゃべってるから仲間に入りたいんじゃないかな」と言い、C母は「ああ、そうね」「みんなと一緒に思ってる。家族」と答え、C児も「生まれた時からいるから」「ヒナから飼ってるから」と同意する。インタビュアーが、先に話した、

*1 SCATによる分析：

SCATによる分析では、異常値や外れ値を除外しない全データ使用性により、分析の手続きやその意味、意義の不可解さに対する明示性を確保している。そのためすべての発話をコーディングしそれをストーリーラインに含める。しかし、本分析では、母子の語り合いから導かれる子どもの語りに焦点化するため、意図的に、インタビュアーのコードをストーリーラインに含めていない。

表1 C児とC母のインタビューの一部 SCAT分析 その1.

番号	発話者	テクスト	〈1〉テクスト中の注目すべき語句	〈2〉テクスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
7	I	子ゾウとお母さんゾウは離れていて、あんまり一緒にいなかったので、不思議だなあと私はすごく思っていました。その辺りとかはなんかこう、どういうふうに思いましたか？何か思ったことはありましたか？	子ゾウとお母さんゾウ、離れていて、不思議、どういうふうに思いましたか	ゾウの親子の関係性、レア感などの気づきへの問い合わせ	ゾウの親子への気になったこと、問い合わせ	ゾウの親子の印象、問い合わせ	
8	C児	なんか不思議だなあって思った。	なんか、不思議	なにかの疑問、違和感	ゾウの関係性への疑問、お母さんより優先した理由の解明希望		
9	I	どういうふうに不思議だなあって、思ったの？	どういうふうに、不思議	具体的な発言のうながし	深い発言へのうながし	より多くの語りのための問い合わせ	
10	C母	何か動きがあれだったじゃん。	動き	レアな動き	面白い動きへの注目	ラッキーな出会い	
11	C児	うん、なんか、変な風に（「じゃん」に重なっている）	変な風に	通常出ない動き	目を引く動き	誰もが認識する変化ある動き	
12	C母	お膝とかをなんかこう、（「変な風に」に重なっている）	お膝	膝の動き、特徴的	見慣れない動き	レアなゾウたちの動き	
13	C児	座ってたよ。	座ってた	ゾウの座り方、珍しさ、くつろぎ	座るゾウへの興味、くつろいだ姿	子ゾウのくつろいだ姿	
14	C母	あ、座ってたね。うん。	座ってたね。	座るゾウ、確認、認識	興味を引く動き、子どもとの共有	子どもとの楽しい動物見学のひと時	
15	C児	うふふふふ。	うふふふふ	うれしい笑い、楽しそうにしていたゾウへの思い	ゾウの気持ちと同じ気持ち	楽しい気持ち	
16	C母	どうだったっけなあ（この後、少し間がある）	どうだったっけ	想起の最中	記憶の詳細確認	記憶の正確さの追求	
17	C児	なんか、インドから来たゾウと、なんでもあんなに仲がいいんだろうなあって思った。	インドから来たゾウと、なんでもあんなに仲がいい	祖国の異なる、血縁でないゾウ達、親密さへの不思議さ	ゾウ同士の親密さへの疑問、親密さの秘訣への興味	親密さに必要なものへの興味	
18	C母	え？	え？	予想外の答え、驚き	子どもの理解を超える回答	一瞬の思考の停止	
19	I	仲がいい？ああ、そうだね。	仲がいい、そうだね	親しさへの注目と同意	同意による真意の聞き出し	傾聴	
20	C児	遊んでいる？そんな感じ？うふふふふ	遊んでる？そんな感じ？	共に遊ぶ、友達、家族、理由	遊びの効用、類推、親密になる手段、好きなことをする相手、納得できる理由	喜びや楽しさ、関わりの深化の結果、親密さの理由	
21	C母	うん、うん、インドから来て…	うん、インドから来て	遠い国からきてこの空間にいること	強制的な居住場所	住めば都的発想での親密さ形成	「共話」的やりとり
22	C児	なんで仲良くなっているのかなあっと思って。	なんで仲良く	出身地の違うゾウとの仲良し理由、背景	心の葛藤なしの様子、そう見える理由	子ゾウと血縁でない大人のゾウとのほえましい関係、子ゾウの受け入れられる理由の解明	同上
23	I	ああ、なんで仲良くなったのかなーって？	ああ、なんで仲良くなった	子どもの真意の理解	注目事項にある背景	意外な子どもの視点	
24	C母	あーあ、うん、うん、うん、うん	あーあ、うん	会話の内容の意図を整理	子どもの論点の受け入れ		
25	I	子ゾウが生まれてから、ずっと、いるからね。	生まれてから、ずっと、いる	その世界しか知らない子ゾウ	閉鎖空間、社会、自然な流れ	インプレッシング	
26	C児とC母	うんうん	うんうん	生まれた時からの同居、理解可能	「はじめから同居」の効用、理解	刷りこまれる当たり前感覚	
27	I	お父さんとお母さんと、もう1人のオスのゾウがいるので、兄妹みたいな、あ、家族みたいな感じなのか？	お父さんとお母さん、オスのゾウ、兄妹、家族	仲の良い家族、疑いなし	仲良くせざるを得ない環境or当然そうなること	同じ釜の飯を食う感	会話が重なり議論に
28	C児	あー	あー	そうかも、と思う心	なるほど感		同上
29	I	違うか	違うか	子どもの発言のうながし	自由に語るための発言	自由な発言へのうながし	同上
30	C母	うん、生まれた時に、からいるという（「あー」「違うか」に重なっている）	生まれた時に、からいる	生まれた時から一緒	人間に決められたハイビタット、インプレッシング（刷り込み）	人為的な同一ハイビタット、インプレッシング（刷り込み）	同上
31	C児	あー、生まれた時にいるから（C母の「時に、からいるという」に重なっている）	生まれた時にいるから	誕生時にいること	同居、同一ハイビタット	家畜化による同居	同上
32	I	子ゾウにとっては、（「生まれた時にいるから」に重なっている）	子ゾウにとっては	子ゾウの立場での思考	子ゾウファースト	子ゾウへの同一化	会話重なり議論に
33	C児とC母	あははは、うふふふ	あははは、うふふふ	発言して納得する様子	解決の喜び	問題解決の円満さ	同上
34	C母	そうそうだね（「うふふふ」に重なっている）	そうそうだね	同意、生まれた赤ちゃん目線	赤ちゃん目線	赤ちゃんの選べない環境	同上
35	I	生まれた時からいるじゃんね。（「そうだね」に重なっている）	生まれた時からいるじゃん	誕生時から、そばにいる家族	そばにいる人=家族である必然性	護られる存在と護る存在	同上
36	C母	うんうん、その、ファミリーといつか	うん、うん、ファミリー	生まれた時から変わらず一緒に過ごす存在、家族	同一ハイビタットでの暮らし、動物に対する理解と愛情	動物に対する情動的な同一化	同上
37	I	その、閉鎖空間の中に、家庭の中に、そのゾウがいるから。（「ファミリーといつか」に重なっている）	閉鎖空間の中、家庭の中、そのゾウがいる	逃れられない環境、家庭の環境	与えられた環境や関係に疑問なし	本能的行動、インプレッシング	同上
38	C児とC母	うん	うん	C児の同意（親子の一一致意見）	納得できた議論、C児の納得感	(C児の)納得、ある種の達成感	

表1(つづき)

番号	発話者	テクスト	〈1〉テクスト中の注目すべき語句	〈2〉テクスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
39	I	なんで仲がいいのかなあ、か。	なんで仲がいい、か	別の理由の存在への気づき	他にあるかもしれない理由	疑問の奥深さ	
40	C母	うーん、あ、そうか、子ゾウがどうして、あ、インドゾウって書いてあるから、インドの感じ？ なに？ なんだろう。	子ゾウがどうして、インドゾウ、インドの感じ、なんだろう	背景にあるもの、子ゾウにとっての国籍の無関係さ	背景、現在のハビタットの重要性	子ゾウの気持ちの解明、環境順応？	ネガティブ・ケイバリティ
41	C児	あはは	あはは	なか違う感じ、納得の不十分さ	もう一声欲しい感じ	もやもや感ありの状況	同上
42	C母	ああ～遠くから来た感じ？	遠くから来た	異国の地での暮らし	同じ種としての連帯感	生きていくすべ？	同上
43	C児	うーん。	うーん	そうではない感じ、何か別のもの的存在	ほかにある理由	すぐには解明できない理由の存在	同上
44	C母	あー何だろう、	何だろう	ほかにある理由	別の要素の存在	まだある別の要素	同上
ストーリーライン (現時点で言えること)	C児は、ゾウたちの誰もが認識する変化ある動きや子ゾウのくつろいだ姿を見て楽しい気持ちになったが、子ゾウと血縁でない大人のゾウとのほほえましい関係に、親密さに必要なものへの興味を抱き、お母さんより優先した理由の解明希望をした。C母は、レアなゾウたちの動きとのラッキーな出会いに、子どもの楽しい動物見学のひと時を思い記憶の正確さの確認をしようとしたが、直後のC児の意外な反応に一瞬の思考停止となつた。C児はゾウたちの親密さの理由が、喜びや楽しさ、関わりの深化の結果と考えた。C母は住めば都の発想での親密さ形成を思ったが、C児は子ゾウの受け入れる理由の解明を願った。C母は子どもの論点の受け入れをした。インタビュアーの説明に親子は、刷りこまれる当たり前感覚をもち、C児はなるほど感を抱き畜産による同居を考え、C母は人為的な同一ハビタットでのインプリンティング(刷り込み)だと感じた。C母は、動物園の赤ちゃんの選べない環境を思い動物に対する情動的な同一化をし、そのことでC児の納得を得た。親子は、問題解決の円満さやある種の達成感をもった。しかし、子ゾウの気持ちの解明という点では、もやもや感ありの状況となり、「環境順応？」や「生きていくすべ？」というC母の答えを導くものの、親子ともにまだある別の要素すぐには解明できない理由の存在を感じた。						
	・子どもは、ゾウたちの誰もが認識する変化ある動きや子ゾウのくつろいだ姿に楽しい気持ちになる。 ・子どもは、子ゾウと血縁でない大人のゾウとのほほえましい関係の奥にある、親密さに必要なものへの興味のため、お母さんより優先した理由の解明希望を表明する。 ・母親は、レアなゾウたちの動きとのラッキーな出会いに、子どもの楽しい動物見学のひと時を思い、記憶の正確さの確認を試みる。 ・母親は、子どもの意外な反応に一瞬の思考停止となることがある。 ・子どもは、喜びや楽しさ、関わりの深化の結果が親密さの理由になると考える。 ・母親は、住めば都的発想での親密さ形成が動物園でも働くと考える。 ・子どもは、子ゾウの受け入れる理由の解明を願い、母親は子どもの論点の受け入れをする。 ・誕生時からの同居は、親子の刷りこまれる当たり前感覚を表面化させ、家畜化による同居がこの子どもになるほど感を抱かせる。 ・母親は、人為的な同一ハビタットではインプリンティング(刷り込み)があると感じる。 ・母親は、動物の赤ちゃんの選べない環境から、動物に対する情動的な同一化をし、その説明で子どもの納得を得る。 ・親子は、議論により問題解決の円満さやある種の達成感をもつ。 ・子ゾウの気持ちの解明という点でのもやもや感ありの状況は、母親の「環境順応？」や「生きていくすべ？」という答えを導いたものの、親子に、まだある別の要素すぐには解明できない理由の存在を感じさせる。						
理論記述	さらに追究すべき点・課題						

※「発話者」の「I」はインタビュアーを指す。

子ゾウと出身国のあるゾウが親密だった理由と類似していないかと問い合わせ、C母は「そうそうそう。物心ついたらここにいたってこと」と答える。

これらの会話からC児とC母は、血縁や種に関わらず同居していることを、家族とみなす条件の1つとしてとらえていることがわかる(これはインプリンティング(刷り込み)ととらえることができるが、それについては「5 総合考察」で論じる)。神経科学者のBartalらは、透明の筒の中に閉じ込められたラットを別のラットが助けるかどうかの実験で示された、ラットは異なる遺伝子タイプであっても一緒に育っていれば救出行動をとるという結果から、「ラットは一緒に育った仲間に愛着を覚えて家族であると考え共感する」ことを明らかにしている(Bartal et al., 2014)。C児の語りの中にも、ペットとの家族的関係を物語るものがある。

1つは、学校から帰宅後すぐにインコの顔を見る理由についての次の会話である。C母が「ただいま(という感じ?)」と問い合わせ、C児は「うん、いつもピッチャー(インコの名前)がいるんだよ」と答え、C母は「ああ、家で待ってる」と応じる。濱野(2007)は、ペットと飼い主との関係には、動物が示す「無条件の受容」の存在があり、独自な特徴として見出せると述べている。この家族にとってペットの存在は家庭内の平穀や安心と同等なもので、ペットは家族的存在になっていると考えられる。

もう1つは、インコの飼育を決めた時にについての次の会話である。インコのヒナをペットショップで見た時の様子をC児が「ヒナがねえ、かわいいね」と言い、C母は「ケースの中でね、すごいちっちゃいから」と述べ、C児は「こんなちっちゃい」と同意する。さらにC母が「なんか店員さんが、すごい説明してくれちゃって」「ヒナの時に飼うと、本当に、お母さんっていうかなんか、餌を与えてあげなきゃいけないのよ、口に離乳食みたいに、ふやかしたやつを…」と語ると、C児はヒナの様子を思い出

し「むちゃ、 ぶるるるって」と言い、 C母は続けて「それから、 なんかそこから飼うと、 ほんとにずっと、 手に乗ったり、 肩に乗ったり、 だから、 その時飼う、 飼ってると、 最初は大変だけどいいですよみたいな。 そしたら、 (子どもたちが) それ絶対、 それやるって」と語る（これはインプリントィングの説明もあるが、「5 総合考察」で論じる）。 このように、 C児とC母にとって動物の赤ちゃんの飼育は、 新しい家族の受け入れであることがわかる。

松田（2017）は、「家族とみなす範囲」について、 ペット飼育未経験者は血縁関係上の伝統的な家族を思い浮かべるが、 ペット飼育経験者は愛情をもって一緒に暮らす自分以外の生命を家族として顕在化させると述べ、「家族を考える際に、 自分中心の『個』から見るか、 自分を取り巻く『周辺』から見るのか」で異なると報告している。 また、 金子・村上（2003）は、 家族の絆はいわば愛情の絆ともいえ、 ペットは心が通じ合える家族の一員と認識され、 緊張感を和らげ鎮静作用や癒しをもたらす存在だと述べている。

C児とC母にとっての家族は、「自分を取り巻く『周辺』から見る」とらえかたであり、 それは一緒に居住することで生じていたと考えられる。 C児は家族の範囲を、 同居の動物（アジアゾウ）たちが見せた家族的関係と、 ペットのいる自分の居住空間内でのそれを照らし合わせて類推し、 とらえているのではないか。 動物は人間の考える家族という概念をもっていないが、 人間はそれを動物に投影して動物も家族をもっていると考える。 そして、 その動物が人間とも家族になり得るのだと考える。 このようにとらえるなら、 動物の存在によって、 C児は自分にとっての家族が動物を含むものであると認識したと考えられないだろうか。

4.2 C児のもつ動物と共に在る感覚

動物園の動物の居住空間に思いを寄せながら、 動物の心を読みとり共感的理解をする語りもある。 C児は動物園で感じたこととして「(動物が) 気持ちいいのかなあ」と言い、 C母は「中の環境はどうかとか」と続け、 C児は「うん」と答える。 そして、 獣舎内のアザラシやコツメカワウソ、 大型インコについて、 C母が「ああ、 そうか。 この中はどうかなあとか、 楽しく過ごしているのかなあとかいうふうに思う、 思ったりする」と言い、 C児は「うん。 ここは狭そうだなあとか」「コツメカワウソ、 もうちょっと、 広くしてあげるとよかったです」「こんな大型インコでもめっちゃ狭かった、あれ。 もうちょっと、 あのなんとかハウスとかあったじゃん。 バードハウス?」「あっちの方がいい」と語る。

再びペットのインコに関する会話を取り上げると、 ペットがはじめて飛んだ時の様子についての次の会話も同様で、 動物の心情に思いを寄せ、 共感的理解をする語りがある（表2）。 C母が「高いって思うみたい最初は」と言い、 C児は「怖い、 高い」「だって、 自分でもあんなとこ行ったら、 高いって」と答え、 C母は「降りるの、 鳥もなんか怖いなあって、 ずっと、 だから、 誰かがこうやって、 迎えに行かないで降りれない」と述べる。 インタビュアーが、 飼育すると動物の感情がわかるようになるのかと問うと、 C児は大きな声ではっきりと「まあわかるよね大体」と答える。 また、 ペットのインコの放し飼いについてC母が「1時間、 2時間、 いくかいかないか。 でもまあ出さない時は、 全然出さないけれど、 長い時は2時間ぐらい飛んでるよね、 家ん中」と言い、 C児は「でここに来て、 しゃべってる。 で飛ぶときに、 ピッチャー（インコの名前）って言ってるんだ」「ピッチャーって言ってまたしゃべって、 ぐにゅぐにゅしゃべって、 また、 ピッチャーって言う」と語り、 インコを定期的に籠から出して自由にさせ、 インコとの接触やコミュニケーションの様子を楽しく伝える。 さらに、 C児の次のような発話から、 鳴き声や行動をとおして動物の気持ちをC児なりに理解していることがわかる。「(インコは) 機嫌が良い時。 のってるとき（にしゃべる）」「隅っこでね、 隠れて」「自主練（して上手にしゃべろうとしている）」「隅っこで隠れてる。 でね、 うちらが見たら、 ぴたって止まるんだよ」「でも、 声、 大きいから、 バレる。 うふふ」「(練

表2 C児とC母のインタビューの一部 SCAT分析 その2.

番号	発話者	テクスト	〈1〉テクスト中の注目すべき語句	〈2〉テクスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
1247	I	でも、ヒナってそんな長い期間、ヒナじゃないよね	そんな長い期間、ヒナじゃないよね	短いヒナとの時間	短い蜜月	感情の衰退となりうる要素の確認	小さいから可愛い?
1248	C児	うん、	うん	ヒナの時間の短さ	インコの成長の振り返り	ヒナへの愛情形成期間	
1249	C母	うん、一気に大きくなった	一気に大きくなった	早い成長、予想外	変化の大きさへの驚き	動物飼育の驚きと実感	
1250	C児	うん、早い	うん、早い	実感としてのヒナの成長	見守ったヒナの生長期間	共に過ごした時間	
1251	C母	最初は本当、こんなちっちゃい、あの昆虫ケースみたいなやつを買って飼ってたんだけれど、	最初、こんなちっちゃい、昆虫ケース	ヒナの小ささ、飼う環境	サイズに合わせた飼育環境	窮屈な飼育場所	会話の重なりあり
1252	C児	もう、ほおってあがっててくる(「買って飼ってたんだけれど」に重なっている)	ほおってあがってくる	鳥の飛び跳ねの様子、勢い、出たい様子	飛びたい本能	アブリオリな動き	同上
1253	C母	飛び上がってきて、もう1週間過ぎるともう、飛びたいっていうやっぽだからなんかもう本能が、すごい早いんだ何か	飛び上がってきて、1週間過ぎると、飛びたい、本能	脱出、1週間で大きくなるペット、本能を見せるペット、驚き	瞬く間の脱出行動、違う種の成長速度への驚き、本能の行動	瞬く間の脱出と飛行、飼育の醍醐味	
1254	C児	でも、最初はあそこをのばって、降りれない	最初は、のばって、降りれない	ヒナの飛ぶ練習、からかい	興味深々、面白さ、意地悪な姉弟的感覚	インコの行動の不可解さ、仲間的意識の保有	
1255	C母	降りれなかったね自分で	降りれなかったね自分で	飛んでも降りられないヒナ	失敗は成功のもと	ペットのインコとの最初の一歩エピソード	
1256	C児	ははは	ははは	失敗談、愉快さ	なつかしさ、ほほえましさ	楽しい思い出	
1257	C母	だから誰かが迎えに行ってあげないと、	誰かが迎えに	家族の迎え、飛び始める手助け	家族的な存在になる出来事の一端	家族としての見守り	会話の重なりあり
1258	C児	飛べたふりっていう	飛べたふりっていう	インコの行動の理由付け、好意的、黙つててあげる的感覚	暖かいまなざし	愛情あるまなざし	同上
1259	C母	飛んでいくんだけど(「ふりっていう」に重なっている)、ずっと見てるハハハハハハ	飛んでいくんだけど、ずっと見てる	インコの行動のおかしさ	見守る家族	笑いながら助ける子どもの存在	同上
1260	C児	怖い(「ハハハハハハ」に重なっている)	怖い	インコの気持ち	インコの心の理解、代弁	インコとの心の通り合い	同上
1261	C母	高いいつて思うみたい最初は、	高いいつて思う、最初は	インコの気持ちの推察	家族同士での共有	家族メンバーの認識	同上
1262	C児	怖い、高い	怖い、高い	インコの気持ちの代弁	会話不足を補う共感	共感	同上
1263	C母	あー降りるの、鳥もなんか怖いなあって、ずーっと、	降りるの、鳥もなんか怖いなあって、ずーっと、	当たり前的能力、飛べるまでの練習の辛さ	楽なことはない感、共通なもの	動物への共感	同上
1264	C児		自分でもあんなとこ行ったら、高いっ	インコと自分の同一視	自分との置き換える	自分との重ね合わせ	同上
1265	C母	だから、誰かがこうやって、迎えに行かないと降りれない、うふふふふ	誰かが、迎えに行かないと降りれない、うふふふ	最初はだれもが怖い感を共有、手助けのいる状態	ほほえましさ、共感	ほほえましい母親的感情	
1266	I	そういうなんか、鳥の気持ちっていうか、動物の気持ちがわかるような感じになってくるの? だんだん飼ってるとそういうこと?	鳥の気持ち、わかるような感じになってくる、飼ってると	同居の効用、動物の感情の理解援助	そばにいると理解できること	共に在る感覚	素朴な疑問
1267	C児	まあわかるよね大体、	まあわかるよね大体	動物の気持ちの理解の認識、誇らしさ	当然、動物と気持ちの共有	当然わかるペットの気持ち	大きな声ではっきりと発言
1268	C母	ああ、様子を見ていると?	様子を見ていると?	ペットの様子からの心の理解	長い付き合いから生まれる感情理解	あうんの呼吸	
1269	C児	うん、	うん	熟知したインコの行動、気持ち	気持ちは類推、確信的なもの	以心伝心のやりとり	大きな声で発言
1270	I	ああ、どうしたいのかなあ、っていうのが?	どうしたいのかなあ	インコの気持ちの察知	家族的な理解	信頼関係	
1271	C母	うんうん、	うんうん	動きからの類推、動物の気持ちの理解	内的状況の解釈、感情の同一化	情動的な同一化	
ストーリーライン (現時点で言えること)		ヒナと共に過ごした時間は、ヒナへの愛情形成期間であり、親子にとって、ペットのインコとの最初の一歩エピソードは楽しい思い出で、動物飼育の驚きと実感を伴った飼育の醍醐味でもあった。インコには窮屈な飼育場所からの瞬く間の脱出行動と飛行の姿に、C児はアブリオリな動きを感じた。そしてその後のインコの行動の不可解さに、愛情あるまなざしを向け、仲間的意識の保有をした。C母もインコを、笑いながら助ける子どもたちとみえており、家族としての見守りをし、家族メンバーの認識をしていった。C児は、インコに共感し、インコとの心の通り合いで自分との重ね合わせをした。C母も、動物への共感を示し、ほほえましい母親的感情をもった。C母は、C児の語った当然わかるペットの気持ちや、うんの呼吸での以心伝心のやりとりには、情動的な同一化があると感じた。					
理論記述		・ヒナと共に過ごした時間がヒナへの愛情形成期間となる。 ・ペットのインコとの最初の一歩エピソードは、動物飼育の驚きと実感を伴った飼育の醍醐味を母子(飼い主)に味わわせ、楽しい思い出となる。 ・ペットの、窮屈な飼育場所からの瞬く間の脱出行動と飛行の姿に、子どももアブリオリな動きを感じる。 ・子どもも、インコの行動の不可解さにも、愛情あるまなざしを向け、仲間的意識の保有をする。 ・母親はインコを、笑いながら助ける子どもの存在とみて、家族としての見守りをし家族メンバーの認識をする。 ・子どもも、インコに共感し、インコとの心の通り合いで自分との重ね合わせをする。 ・母親は、動物への共感を示し、ほほえましい母親的感情をもつ。 ・子どもも示す当然わかるペットの気持ちや、ペットとのあうんの呼吸での以心伝心のやりとりは、動物への情動的な同一化によることがある。					
さらに追究すべき点・課題		※「発話者」の「I」はインタビュアーを指す。					

習の成果の披露はあるのかという問い合わせる)「うん、放したときに肩に乗ってきててくれる」「(肩の上で)今日は楽しかったとか、朝見ようとか(しゃべる)」。そして、C児はインコの様子について「なんかたまに丸くなる」「膨らむ。なんか丸くなる」「顔がわーって」「いつも、キリッとしてるんだけど」「いつもスレンダーなんだけどその時だけスクってなる」「あのね、ママだけほっぺしてくれるんだよ」と語り、C母も「そうそう、わーってボールみたいな」「でもすごいあれだよ、機嫌が良かったら、なんかこうやってなんか、ほっぺ(撫でて、ここかいて)してって言う」と答える。

小松(2019)は、動物の鳴き声、行動や態度、目や耳、顔全体や口元の表情、体毛の表情変化などで動物の繊細な感情が読み取れ、人の語りかけへの動物の様々な反応で、人の思いや言葉を時に動物が理解していることがわかるとしている。そして人と動物のコミュニケーションは、観念的で情緒的であり、合理的で科学的ではないが、人が生物という同じいのちと向き合い自身と意識を重ねた時、会話が生まれ、動物への関心の高まり、思いやり、いたわり、やさしさが芽生えると述べている。動物を相手にしたものについてではないが、国際情報学者のチェンは、コミュニケーションの意味を、わかりあうためのものではなく、わかりあえなさをたがいに受け止め、それでもなお、共に在ることを受け容れるための技法であると説明し、他者との関係性について、たとえ狭義の「家族」ではないとしても相手のことを自己の内側に生起させることが、相手と共に在るという感覚を作り出し関係を持続させると述べている(チェン、2020)。

また、チェン(2020)は、他者と自分を橋渡しする心理的土台の1つとして日本語教育学者の水谷による「共話」(話し手と聞き手の区別がなく相手に文の後半の完成をゆだね、ともに文を作る会話:水谷、1988)をあげ、不完全でもすべて言わなくてもわかってくれる人の存在と実感が安心を導くとしているが、この「共話」は、C児とC母の対話の中でみられ(表2)、笑いにあふれながらも温かく落ちていた会話が形成されていた。インタビューで感じられたC母のおおらかな雰囲気は、会話すべてを穏やかに包み込みC児はくつろぎの中にいた。C児は動物の家族を自分の母親との「共話」関係と同様に見ており、動物とのコミュニケーションにおいて、それが投影されているのではないかと考えられる。

なお、ペットは人と特別の関係にあるといわれる。藤崎(2002)は、人はペットに情動的な同一化をしてその内的状態を解釈し、ペットに問い合わせたりペットを代弁したりしながら関係を深め、ペットとの間に「心」の存在を立ち上げるとし、「心を読みとる(mind reading)」という人独自の能力が、異なる種の動物を飼育する人間の習慣に大きな役割を果たしていると述べている。C児は、インコの購入前にペットショップで何度も熱心にヒナを見ており、育てる喜びやコミュニケーションの楽しみ(C児「しゃべって欲しいねえ、飼ったら」)を抱きながら飼育している。このことから、C児はインコを、子どもまたは兄弟姉妹的存在であるととらえていると考えられる。内田・三好(2008)は、ペットと飼い主との関係について、母親と子どもの相互関係(強い愛着)に類似し、ペットにとって飼い主は生きるために必要な存在で、飼い主にとってペットはかけがえのない存在であり、たがいに離れられない愛着が形成されていると述べている。また、動物とペットに対する人の愛着には、その人らしい対人関係のあり方が現れ、その人の対人関係における世界のとらえ方がペットとの関係の中に映し出される(濱野、2009)という。

これらから、C児は動物飼育を通して、情動的な同一化や内的状態の解釈によってペットの心を読みとり、ペットと向き合い意識を重ねたコミュニケーションをするようになり、ペットに強い愛着を感じていると考えられる。また、ペットとのコミュニケーションの様子から、自分の母親との「共話」関係を投影した、動物と共に在る感覚を得ていると考えられる。これらがC児に動物園の居住環境から動物的心情を推測させたのではないか。

4.3 偶然が導く、自由な学習への期待

ふたたび動物園での観察に戻ると、C児の好んだ動物は爬虫類であり、ヘビについての語りが多かった。「ちょっと変なところがいい」「変わってる、何か形とか違うじゃん」「ぬるぬるしてるやつ。全然違う」「爬虫類とか色が独特じゃん。色がいろいろあるじゃん」「色が決まってない」「地味な奴がいたり、奇抜な奴がいたり」。C児はヘビについて、形態の奇抜さや体毛のない異質感ある冷たい皮膚、美しくきらびやかで多彩な体色に、筆者の想像以上に面白さを感じるとともに、個々に異なる体色の色幅の違いから個体ごとの美しさも感じている。動物園ではヘビなどの爬虫類は人気動物ではなく（ベネッセ教育情報研究所, 2021）見過ごされる存在である。しかし、C児にとっては魅力的な動物である。その理由をC児は、小学校5年生ながら「多様性があるから」と答え、そして、色や形態が「1つ1つ、1匹1匹違う」からだとしている。ペンギンの頭部にある金色の冠羽の形態に惹かれていたが、それも動物のもつ多様性に魅了されていることの表れだと考えられる。また、C母が「色が好きなんだねえ、いろんな色とか、模様とか」と問うと、C児は「ずっとおんなじのだと飽きちゃう」と言い、1匹の動物を長い間見ることではなく、多彩な色をもつ動物を見比べることに面白さを感じるとしている。つまり、対象となる面白さは、単一の皮膚色をもつと一般に受け止められているゾウのような動物に対してではなく、先入観を覆させるほどの多様な皮膚色をもつヘビのような動物に対してであり、その意外性に対して向けられている。これらを踏まえると、C児にとって動物との接触体験は、偶然の出会いとそこから生まれる意外性をもつ学びであることができる。今田ほか（2005）は、博物館展示物の評価項目の一つである「意外性」の重要性を、「意外性」は「文化理解」と結びつくことで、一見して何かわからないモノであっても、その使われ方を理解した時点で異文化理解や自文化理解につながるという点で評価できると述べている。これに基づけば、動物園の、意外性をもつ学びが動物および人間世界の理解を促し、動物園が人間と動物の関係を見つめ直す場所であると考えることも可能ではないか。

くわえて、一般に動物の体色の多くが単調であるというステレオタイプがあるならば、それは、動物の個性を見つめる姿勢に影響を与えていないのだろうか。C児はヘビの体色が個体それぞれで多様性に富んだものであり、どの個体がどのような色を見せてくれるのかに関心を寄せ、動物を個としてとらえている。私たちは、「自動的処理」という能力で、比較的少ない資源で複雑な世界のおおよその意味を素早く抽出し、大きな支障のない限り素早く「結論」を下すことができる（遠藤, 2004）という。仮に動物園の複数訪問によるステレオタイプの完成があるならば、それは、思考発展の閉鎖をはじめ、新奇性の追求や新たな発見や出会いの機会などへの期待感の減少につながると考えられる。しかし、生物との関わりに法則はなく動物の体色や形態、行動なども不意なものである。どのような出来事に遭遇するのかわからない偶然性は、個をとらえるC児には魅力的だととらえられている。Falk and Dierking (2000) は、自由な選択で学習が行われるときの動機について、そのほとんどが、新奇性への期待と、好奇心が刺激されて満たされるという予測であると論じている。親子での動物園訪問では、子どもの突然かつ予想外の行動や発言で、大人の抱くステレオタイプは崩され、C児の示した偶然性を楽しむ世界へと誘う可能性がある。これは、前述した博物館体験の特徴である来館者同士（ここでは親子）の相互作用によるものだと考えられる。仏文学者の野内は、「偶然」は人びとの関心性と意外性の有無、必然性の否定に関連するとし、日本人は、条件付きで偶然を受け入れ、たまたま目撃される偶然の「妙」を喜び、楽しむのだと述べている（野内, 2008）。C児は幼いながらも日本人のこのような特性を反映しているのかもしれない。

5 総合考察

以下では、C児の「家族的感覚」についてインプリントィング（刷り込み）との関係から、そして、

自由な行動下で動物を個としてとらえるC児の姿勢について動物園で生じる「偶然」という側面から、それぞれ論じる。

5.1 家族的感覚とインプリンティング（刷り込み）

ペットのインコと動物園のゾウで見せたC児の家族的感覚やその理解（家族=同居する生物）を、動物行動学でいうインプリンティング（刷り込み）という観点から検討してみたい。インプリンティングは、カモやアヒルなどの早成性の鳥のヒナが、孵化後間もない時期に提示された動く物体の後を追う現象のこと、ローレンツ（1949）は、鳥のヒナが刷りこみ可能な時期をともに過ごした動物に向けられる、自分がどの種類に属しているかを知るやりなおしのきかない現象であると述べている。インプリントされる種類は求愛行動など社会行動に関するものが多く（黒崎、1980）、アヒルやニワトリなどの離巣性の鳥に見られ、親子間の社会的な愛着を形作るまでの必要な過程だと考えられている（本間ほか、2013）。このインプリンティングの興味深い点は、生得的に見える動物の能力も後の学習によって決定されることと、習得可能期間が限定され一度習得すると消去できない（不可逆的である）ことである。

小原（2000）は、動物学の立場からインプリンティングは人間でも働いているとし、外部的条件（ヒトでは複雑な社会・文化的諸条件、他の種では生態的条件）が行動の型の形成に関与し、その形成の働きの基本が「刷り込み」であり、種の行動の型は生活に必要な順序に従って形成され、発育段階に即して種としての生活様式が完成していくと述べている。そして環境学者の上柿も、「『ヒト』は『社会』によって『インプリント』されることで本来の能力を身につけていく」と述べ、ヒトのさまざまな社会行動もインプリントによって形作られることを強調している（上柿、2014）。また、動物生理学者の本間らは、学習には階層があり、最初にインプリンティングが習得されることでその後の学習の習得効率が上昇するとし、インプリンティングにはブライミング（点火薬、起爆薬）機能があると報告している（本間ほか、2013）。さらに松島（2012）は、行動知能学の分野から、インプリンティングは動物の本来もっている能力（認知や学習や嗜好）を引き出し、心の働きを目覚めさせるとしている。これらから、ヒトは社会という環境の中で、それに適応するためのさまざまなインプリンティングを経て、学習能力や心などを獲得し、人間形成をしていくのだと考えられる。

本論文では、インプリンティングを、ローレンツ（1949）の示した鳥のヒナの追従行動のことだけではなく、動物の社会的な行動に関して起こる刷り込みのすべてとし、とくに親子間の社会的愛着を形作る過程など、生物の生得的な能力を引き出すものとして記述する。

前述したC母が語ったペットショップ店員の言葉（ヒナからの飼育でインコは人の手や肩に乗るようになる）は、インコのインプリンティング（人間に対する愛着行動）の説明であり、その後のC児の反応（「それ絶対、それやる」）から、インコのインプリンティングへの期待の高さがうかがえる。C児は、インプリンティングという言葉こそ知らないものの、飼育前からインコにインプリンティングが起こること、飼育中の、また成長したインコの愛着行動からインプリンティングが起こったことを認識していると考えられる。そして、C児の抱いたこのインプリンティングへの期待は、インコとのコミュニケーションを楽しみたいというもので、C児自身のインコに対する愛着の発生を予期するものだともたらえられる。くわえて、実際にC児にインコへの愛着行動がみられることから、ヒナからの飼育によって生じる動物のインプリンティングは、「動物から人間への愛着」だけでなく、「人間から動物への愛着」も生じさせると考えられるのではないか。つまり、飼育の過程は小原（2000）のいうヒトの「社会・文化的諸条件」の1つで、C児はインコと同様にインプリントされたのではないか。このように考えると、インプリンティングが子どもの動物への愛着の形成に関わっている可能性があると推察できる。

さて、動物である来園者が同じ動物を観賞するという動物園での体験が、その人にもたらす意味は、

来園者がどのような概念で動物をとらえているかという認識に大きく依存すると考えられる。ペットのインコへのC児の家族的感覚は、飼育という動物との接触環境でインプリントされ引き出された「心」の働きによるものであり、動物に対するC児の認識になっていると考えられる（図1）。この認識で動物園での接触体験がなされ、C児は、子ゾウと出身国の異なるゾウとの親密な関係に興味を抱き、動物の居住環境をはじめとする動物への共感的理解を示したのではないか。

なお、動物への共感的理解に関し、Monteiro and Reis (2018)は次のように解説している。動物との子どもの接触体験で、人間と同様の情緒的な絆を動物と築き動物に共感することは、他の動物にも存在する「主体性」を実感する（egomorphism擬自己化：私に似ている Milton, 2005）ことにつながる。この動物との接触におけるegomorphic（擬自己的）なアプローチは、人間のもつ動物に対する優位性や独立性という概念を覆す機会を与えるのだ。

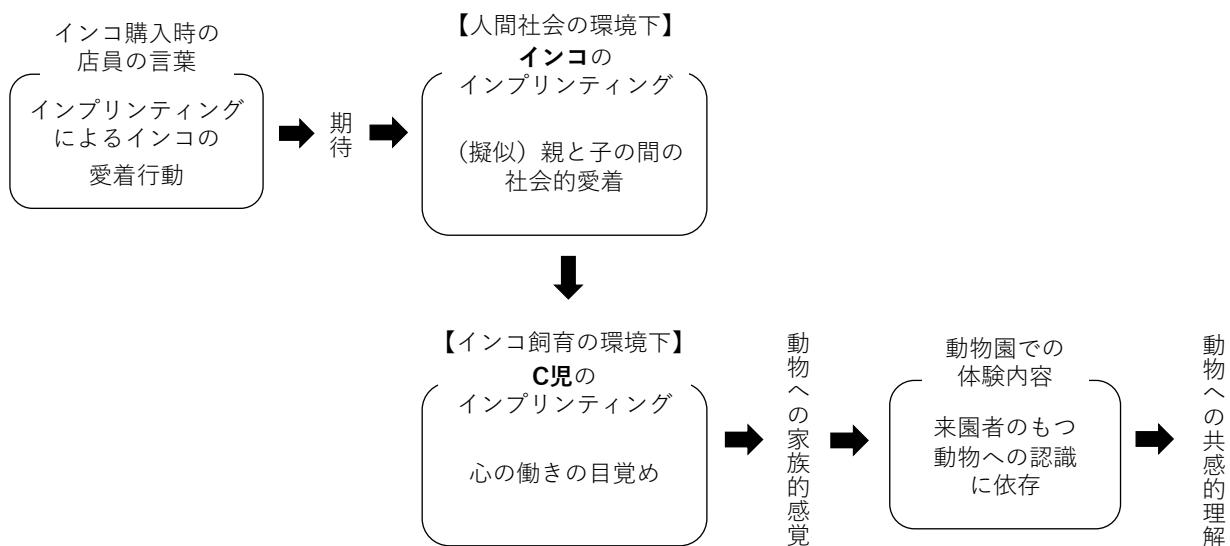


図1 C児のインプリント経緯と動物園体験との関係。

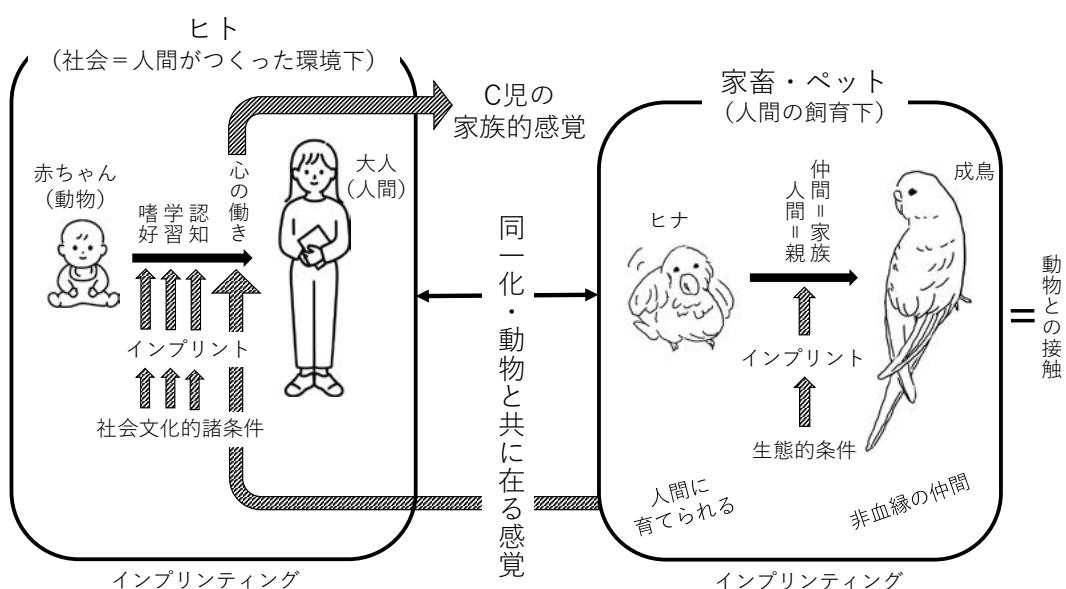


図2 インプリントによるC児の家族的感覚の形成。

これらを総合的に考察すると、動物との接触体験が、動物と同じインプリントングの仕組みの中で、本来もっている人間の能力である「心」の働きを目覚めさせ、C児に家族的感覚を形成させたと考えられるのではないか（図2）。そして、動物園での動物との接触体験でC児は動物への共感的理解をもち、egomorphic（擬自己的）なアプローチで動物と接していたのではないか。そうだとすれば、このことは、動物との接触体験が、自然界への子どもの情緒的なつながりの形成に、どのように関わるのかを検討する際の手がかりになると考えられる。

5.2 動物園における、目的性が付与された偶然

動物園での動物との出会いやその動きは予測ができない、それらは偶然に任せることになる。この親子は、事前の情報収集や準備をせずに来園したが、動物園を訪問する人々の多くは、予定を立てず楽しく自由に過ごすために来園する（動物園の訪問決定は、数日前以前が46.2%、1週間前は24.4%：アクトインディ株式会社、2022；動物園訪問の目的は、余暇を過ごすレジャーが50.4%、子どもに動物を見せるが44.5%，家族や友人・知人に付き添うが23.7%：札幌市、2022）。これは、よく知られているとは言えないが動物園の来訪に関する重要な特徴のひとつである。学校単位での訪問の場合では、学習計画に基づいたプリントに生徒が記入して観察する形が好まれ、家族単位での訪問の場合では、偶然の出会いとその面白さ、自由性、来園者同士の会話を期待する形が好まれるとすれば、動物園は、園内の教材を使って効率よく適切に学習できる社会教育施設であるいっぽう、自由性や不確実性、曖昧さを享受し余暇の中で興味を探求できるレジャー施設でもあることになる。

ところで、発達心理学者の稻垣・波多野は、動物園や植物園へ行くことは、文化的に準備された生物環境への接触（文化的に組織された活動）であり、われわれの文化では幼児をそこへ連れて行くことが推奨されており、幼児は他の動物や植物の行動を理解しようとする際に、帰納的に人間の属性を投射したり、構造的写像に基づいて類推的に人間に見られる諸過程を付与したりすると述べている（稻垣・波多野、2005）。つまり動物園訪問の理由は、子どもが喜ぶからではなく、幼児が発達する際に必要な社会・文化的実践の中の1つであるからだととらえることができる。その場合、稻垣・波多野（2005）の指摘するような人間との比較による類推という認知活動を子どもに期待しているのだと考えられる。

さて、動物園訪問に対するC児の気持ちは、「うん、なんか面白いのがいたらいいなあって」である。一番楽しかったと語った爬虫類見学が目当てではなかったように、これは、準備のない自由な行動に基づく動物園訪問であり、完璧に準備された計画のもとでは生じない偶然とそれへの期待がC児にあったのだと考えられる。なおC児は「見てない所」を「もっと見たい」という、より多くの動物を観察したいという純粋な気持ちも語っている。これらから、動物園の訪問は、大人から見れば、本項で述べてきた社会・文化的文脈の中での子どもの認知活動を期待して行われるもの、子どもにとっては動物との出会いの偶然性への期待が動機の1つとなることもあると考えられる。前出の仏文学者の野内は、軽視されがちな偶然について、西洋の知の伝統を貫流している「偶然性は学的認識の暗部であり限界である。必然的なものだけが有意味であり、必然的なものにしか真理は宿らない」という発想が、私たちの中にも潜んでいるとし、「形而上の判断の高みに高踏して『無いことの可能』として偶然を眺めるのではなく、微視的な低い視点を取って『在ることの現実』として偶然に対峙することが大切であり、その受け止めた偶然を内なる思い（目的=内的必然性）と突き合わせた時に、偶然は合目的性が付与される」と述べている（野内、2008）。哲学者の小浜が述べるように、必然と偶然とが表裏一体でコインのようなものであり、排除し合うものではない（小浜、2016）と考えて、野内のいう偶然と真摯に対峙するなら、動物園での学びの意味もいっそう深くなるのではないか。

なお、C児の見せた、動物の居住環境に思いを寄せる、動物の心を読み取るなどの動物への情動的な

同一化、偶然出会った各々の動物がもつ色や形態を楽しむなどの動物を個としてとらえる姿勢は、親子での動物園訪問という自由でレジャー施設的な利用から生まれていると考えられるので、最後にそれについて触れる。

Falk & Dierking (2000)は、博物館のような自由な選択の学習 (free-choice learning) に関し、グループによってオリエンテーション (『子ども中心のオリエンテーション (入園場所、動物の配置、店やレストランの位置など見学に安心感を与える情報の提供)』) と『従来のオリエンテーション (動物園の説明や動物園職員との面会、認知的事実や概念の提供)』) を変えた場合の、子どもの動物園体験への影響を次のように報告している。『子ども中心のオリエンテーション』を受けたグループは、他のグループよりも多く学習し、動物園の動物についての認知テストや観察スキルでも、より優れた成績を収めた。すべての子どもたちは、自分は何をしたいか何を見たいかという個人的な意図をもっていたが、2つのグループでその後の行動に違いが見られた。『子ども中心のオリエンテーション』を受けたグループは、心穏やかな状態でよりリラックスして説明に注意を払い動物園での体験に集中できた。いっぽう、『従来のオリエンテーション』を受けたグループは、パンダを見たほうがよいか売店で何を買おうかと始終考えを巡らせ落ち着きがなかった。また、齊藤ほか(2014)は、学校からの動物園訪問に関し、小学校、保育所、幼稚園のいずれにおいても事前事後学習が行われており、小学校低学年では、その多くでワークシートや学習カードを使ったグループ活動が行われていると報告している。これらは、子どもの動物園での体験内容が、学校で用いられる学習の形か自由な学習の形かにより異なる結果になる可能性を示唆するが、これは、学校からの動物園訪問と親子での自由な動物園訪問とでは目的が異なるからである。いいかえれば、そのそれぞれの機会に動物園が学校に提供するものと家族に提供するものとでは、指導に基づく学習と自由な学習という異なるパラダイムにおける異なる機能によって違いが生じるからである。動物に対するC児の豊かな語りや動物園での積極性を考慮すれば、学校からの動物園訪問にも、このような偶然性や意外性、自由性の尊重がもっとあるべきではないかと考えられる。

6 まとめ

C児とC母は、動物に対し家族的感覚をもっていた。C児にとって、動物との接触は動物と共に在る感覚や動物への情動的な同一化を導き出すものであり、ペット飼育の環境は動物のインプリントингと同様の仕組みで、C児の「心」の働きを目覚めさせ、家族的感覚を形成させたと考えられる。また、これによりC児は、egomorphism (私に似ている Milton, 2005) のアプローチで動物園の動物に接していたと考えられた。なお、この家族的感覚は、動物がその生息空間内で見せるものと類似しており、これらから、動物との接触体験が、自然界への子どもの情緒的なつながりの形成に、どのように関わるのかを検討する際の手がかりになるとを考えられる。

一般的に動物園訪問は、子どもに推奨される文化的に組織された活動で、社会・文化的文脈の中での子どもの認知活動を期待し行われている (稲垣・波多野, 2005)。しかし、C児は、それぞれの動物がもつ多様な色や形態に注目して観察しており、動物との出会いとそれへの偶然性・意外性への期待が来園の動機の1つとなっていた。動物を個としてとらえるC児のこのような姿勢は、偶然性・意外性の楽しみと自由な学習の中から生まれていた。これは動物園の社会的役割の1つを示唆するとともに、学校からの動物園訪問時では、偶然性や意外性、自由性をより尊重すべきであることも示唆した。

7 本研究の限界と課題、今後の展望

本研究は、1組の子どもと母親を研究参加者としているため、そのデータは限定されたものである。また、本研究で、地域性や家庭環境が語りに影響を及ぼす可能性が確認された。さらに、本研究の分野

はまだ用語の定義が合意されていないため、すべての先行研究を捕捉できていない可能性がある。くわえて、日本においても、博物館を利用する家族がそうでない家族とは異なる傾向をもち（例：アメリカでは白人と中流階級層の利用が多い（Rogoff *et al.*, 2016）），それが展示や研究などの博物館のサービス提供に、偏りを生じさせている可能性もあげられる。このことは、博物館での研究における知見が多様な来園者すべてに適用できるものにならないことを示唆している。しかしながら、本研究の、動物園の体験についての親子の振り返りの語りを分析することを通して、当事者にとっての体験の意味と動物園の役割を見出すという目的は、一定に達成できたのではないかと考えている。

本研究とこれまでの研究（大橋, 2017, 2025）から、「動物への家族的感覚」（心の働きの目覚め）、「人間の生物性」（動物への回帰）、「動物への自己投影」（メタファー思考による人間との類似性・相違性の把握）、「ストレス・コーピング」（コーピング・サポート機能）が見出されており、人間と動物の関係を考え直させる場所という動物園の役割も示唆される。動物は人間にとって、食料でありながら、癒し対象、家族でもあるなど、両者の関係は簡単には説明できないほど複雑なものである。それは両者とも「動物」という括りの中にいるからだと考えられる。このようなアンビバレン特な関係を理解する一助となるのが動物園であり、動物園は自分と動物との共通点・相違点の認識と自覚を促し、そして、自分が動物（生物）だと忘れないための場所（象徴的な場所）であるのではないか。なお、今回の分析の過程で、「自己家畜化概念」に出会い、これを適用しようとした。それはあらゆる博物館の中で動物園だけが、展示する側、される側、観覧する側のすべてが同じ動物であり、展示物は飼育された動物だが、観覧者も自己家畜化（人工環境への人類の適応の結果、家畜と同様に淘汰によって人間自身が現在のように変化しているという考え方（小原, 1987, 2000））されたヒトという動物であって、展示物と観覧者との間の動物園固有の関係性を分析する上で有益な概念と考えられたためである。しかしこの概念を適用した分析には、現時点での筆者の力量を超える部分があり、今回は断念した。しかし今後の研究では、この概念の適用をあらためて試みたいと考えている。

今後は、これらの知見と課題をもとに、複数の、子どもとその母親を研究参加者とし、動物園の体験を通して子どもが何を語るのかを分析し、かれらの体験の内的な意味を探索することで見出される動物園の新たな役割について、さらに検討する必要がある。

謝辞

本研究の実施にあたり、快く研究参加者となってくださったC児とC母、そして本論文の匿名の査読者の先生方に、心からの謝意を表す。

引用文献

- Abrams, D. A., Chen, T., Odriozola, P., Cheng, K. M., Baker, A. E., Padmanabhan, A., Ryali, S., Kochalka, J., Feinstein, C., and Menon, V. (2016) Neural circuits underlying mother's voice perception predict social communication abilities in children. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America (PNAS)*, **113**, 6295–6300. <https://doi.org/10.1073/pnas.160294811>
- アクトインディ株式会社（2022）「動物園への来園意向・要望に関する調査」9割の親子が来訪経験あり、情報収集はテレビよりSNSが増加傾向／いこーよ総研. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000307.000026954.html>（2024年10月検索）
- Bartal, I. Ben-Ami, Rodgers, D. A., Sarria, M. S. B., Decety, J., and Mason, P. (2014) Pro-social behavior in rats is modulated by social experience. *eLife*, e01385. <https://doi.org/10.7554/eLife.01385>
- ベネッセ教育情報研究所（2021）ベネッセ教育情報. <https://benesse.jp/qa/odekake/20210331-3.html>（2024年10月検索）

- Blud, L. M. (1990) Social interaction and learning among family groups visiting a museum. *Museum Management and Curatorship*, **9**, 43–51. <https://doi.org/10.1080/09647779009515193>
- チェン・ドミニク (2020) 未来をつくる言葉 わかりあえなさをつなぐために. 新潮社.
- Dehaene-Lambertz, G., Montavont, A., Jobert, A., Allirol, L., Dubois, J., Hertz-Pannier, L., and Dehaene, S. (2010) Language or music, mother or Mozart? Structural and environmental influences on infants' language networks. *Brain and Language*, **114**, 53–65. <https://doi.org/10.1016/j.bandl.2009.09.003>
- Eklund, L. (2020) A shoe is a shoe is a shoe: Interpersonalization and meaning-making in museums – research findings and design implications. *International Journal of Human–Computer Interaction*, **36**, 1503–1513. <https://doi.org/10.1080/10447318.2020.1767982>
- 遠藤 由美 (2004) 第13章 人間と社会. (無藤 隆・森 敏昭・遠藤 由美・玉瀬 耕治 著) 新版 心理学, 321–346. 有斐閣.
- Falk, J.H. and Dierking, L.D. (2000) *Learning from Museums: Visitor Experiences and the Making of Meaning*, AltaMira Press, 272p.
- 藤村 宣之 (2011) 第12章 9歳の壁を乗り越える. (子安 増生 編) 発達心理学特論, 198 – 211. 放送大学教育振興会.
- 藤崎 亜由子 (2002) 人はペット動物の「心」をどう理解するか：イヌ・ネコへの言葉かけの分析から. 発達心理学研究, **13**, 109–121.
- 濱野 佐代子 (2007) 人とコンパニオンアニマルの関係における類似性と独自性の検討. 日本心理学会大会 発表論文集, 日本心理学会第71回大会. https://doi.org/10.4992/pacjpa.71.0_3AM138
- 濱野 佐代子 (2009) 第15章 コンパニオンアニマルと子育て支援. (繁多 進 編) 子育て支援に活きる心理学, 173–182. 新曜社.
- 本間 光一・山口 真二・青木 直哉 (2013) 学びの生化学：鳥類の学習（インプリントィング）をモデルとした“脳力”獲得の分子機構. 生化学, **85(5)**, 315–327.
- Howe, M. L. (2022) Early childhood memories are not repressed: either they were never formed or were quickly forgotten. *Topics in Cognitive Science*, **16(4)**, 707–717. <https://doi.org/10.1111/tops.12636>
- 今田 晃一・木村 慶太・青木 務 (2005) 教育メディアとしての博物館の可能性. 教育研究所紀要, **14**, 47–55.
- 稻垣 佳世子・波多野 誠余夫 (2005) 子どもの概念発達と変化—素朴生物学をめぐって. 共立出版株式会社.
- 井上 靖子 (2015) 児童養護施設経験者の心理と支えについての一考察～「語られない語り」への関わりの観点から～. 兵庫県立大学環境人間学部 研究報告, **17**, 1–13.
- 金子 智栄子・村上 綾美 (2003) ペットが及ぼす心理的効果—飼育経験の有無による検討. 文京学院大学研究紀要, **5(1)**, 85–93.
- こども家庭庁 (2023) こども政策決定過程におけるこどもの意見反映プロセスの在り方に関する調査研究報告書. https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ikenhanei_process/pdf/zentaiban.pdf (2024年10月検索)
- 小松 守 (2019) 人は動物と話せるか. あきた経済, **(484)**, 25–26.
- 子安 増生 (2011) 第1章 発達心理学の基礎. (子安 増生 編) 発達心理学特論, 9–27. 放送大学教育振興会, 304p.
- 黒崎 順二 (1980) 家畜の行動および家畜管理学について. 農林水産技術研究ジャーナル, **3(7)**, 46–49.
- 京都市動物園 (2018) 『来園者アンケート』ご報告書. https://www.city.kyoto.lg.jp/templates/shingikai_kekka/cmsfiles/contents/0000244/244895/7anke-to.pdf (2024年10月検索)
- ローレンツ (Lorenz, K.) (1949) *Er redete mit dem Vieh, den Vögeln und den Fischen*. Deutscher Taschenbuch Verlag. (日高敏隆訳 2006) ソロモンの指輪—動物行動学入門—. 早川書房.
- Massarani, L., Rocha, J. N., Scalfi, G., Silveira, Y., Cruz, W., and Guedes, L. L. S. (2021) Families visit the museum: A study on family interactions and conversations at the museum of the universe—Rio de Janeiro (Brazil). *Frontiers in Education*, **6**, 1–12. <https://doi.org/10.3389/feduc.2021.669467>
- 松田 光恵 (2017) ペットは家族とみなせるか (2) —飼育経験の有無が与える影響—. くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要, **50(1-2)**, 51–66.

- Milton, K. (2005) Anthropomorphism or egomorphism? The perception of non-human persons by human ones. Knight, J. (ed.), *Animals in Person: Cultural Perspectives on Human-Animal Intimacy*, 255–271. Routledge.
- 松島 俊也 (2012) 動物に心はあるだろうか? 初めての動物行動学. 朝日学生新聞社.
- 水谷 信子 (1988) あいづち論. (宮地 裕・寺村 秀夫・甲斐 瞳朗・野村 雅昭編) 日本語学, **7(12)**, 4–11.
- 文部省 (1973) 公立博物館の設置及び運営に関する基準. 文科省告示, 第164号, 昭和48年11月30日.
- Monteiro, R. and Reis, G. (2018) Animals “I” us: Egomorphism in/for science and environmental education. *Society and Animals*, **26**, 1–21. <https://doi.org/10.1163/15685306-12341526>
- 無藤 隆 (2004a) 第1章 心理学とは何か. (無藤 隆・森 敏昭・遠藤 由美・玉瀬 耕治著) 新版 心理学, 1–31. 有斐閣.
- 無藤 隆 (2004b) 第11章 発達の基礎となるもの. (無藤 隆・森 敏昭・遠藤 由美・玉瀬 耕治著) 新版 心理学, 257–284. 有斐閣.
- ナイサー (Neisser, U.) (1976) *Cognition and Reality : Principles and Implications of Cognitive Psychology*. W.H. Freeman and Company. (古崎 敬・村瀬 晃共訳 1978) 認知の構図 一人間は現実をどのようにとらえるか—. サイエンス社, 246p.
- 西田 幾多郎 (1937) 西田幾多郎哲学講演集. 燈影舎, 346p.
- 野内 良三 (2008) 偶然を生きる思想「日本の情」と「西洋の理」. 日本放送出版協会, 252p.
- 小浜 善信 (2016) 九鬼哲学における根本問題 一押韻論, 偶然論, 時間論. 現代思想, **44(23)**, 32–52.
- 緒方 泉 (2022) 「博物館浴」の整理・心理的影響に関する基礎研究 (3) 一博物館学を「学ぶ大学生」と「学ばない大学生」を事例として—. 九州産業大学地域共創学会誌, **9**, 48–76.
- 小川 義和 (2019) 博学連携は何のために. 生物教育, **60(3)**, 156–160.
- 小原 秀雄 (1987) 哺乳類としてのヒトをどう見るか. 哺乳類学, **27(1-2)**, 43–51.
- 小原 秀雄 (2000) 現代ホモ・サピエンスの変貌. 朝日新聞社, 294p.
- 大橋 淳子 (2017) 動物園における動物との接触体験を通して子どもは何を語るのか? : 母親への子の語りの分析. 博物館学雑誌, **4(2)**, 31–44.
- 大橋 淳子 (2025) 動物園における動物との接触体験を通して子どもは何を語るのか? (その2) : 動物園の潜在的機能としての来園者に対するセラピューティックな環境提供に着目して. 博物館学雑誌, **50(2)**, 1–29.
- 大野 照文 (2022) 博物館ワークショップで内省は起こるか? 高田短期大学紀要, **40**, 25–35.
- Oliveira, E. A. and Barba, P. (2018) How does learning happen in museums? University of Melbourne. <https://pursuit.unimelb.edu.au/articles/how-does-learning-happen-in-museums> (2024年10月検索)
- 大谷 尚 (2008) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案 一着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), **54(2)**, 27–44.
- 大谷 尚 (2011) SCAT: Steps for Coding and Theorization 一明示的手手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—. 感性工学: 日本感性工学会論文誌, **10(3)**, 155–160.
- 大谷 尚 (2019) 質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで. 名古屋大学出版会, 416p.
- Rogoff, B., Callanan, M. A., Gutierrez, K. D., and Erickson, F. (2016) The Organization of Informal Learning. *Review of Research in Education*, **40**, 356–401. <https://doi.org/10.3102/0091732X16680994>
- 斎藤 千映美・田中 ちひろ・松本 浩明 (2014) 動物園における校外学習の実態と課題 ～仙台市八木山動物公園の事例から～. 宮城教育大学環境教育研究紀要, **16**, 67–74.
- サンデロウスキ (Sandelowski, M.) (1994) *10 Key Questions Over Qualitative Research: Collected Papers of Margarete Sandelowski*. (谷津 裕子・江藤 裕之訳, 2013) 質的研究をめぐる10のキークエスチョン:サンデロウスキー論文に学ぶ. 医学書院, 205p.
- 札幌市 (2022) 令和4年度第2回市民意識調査. 札幌市. https://www.city.sapporo.jp/somu/shiminokoe/sakusei/documents/r04_2_hokokusho_theme5_hp.pdf (2024年10月検索)
- Seltzer, L. J., Ziegler, T. E., and Pollak, S. D. (2010) Social vocalizations can release oxytocin in humans. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, **277**, 2661–2666. <https://doi.org/10.1098/rspb.2010.0567>

- 田中 晶子 (2006) 子どもの証言の信憑性 一事前情報としての知識と尋問方法の影響について一. 四天王寺国際仏教大学紀要, **43**, 49–62.
- 田中 理絵 (2009) 第3章 社会的ネットワークの形成と拡大 一役割学習期 (I) 一. (住田 正樹・田中 理絵 著) 人間発達論, 41–57. 放送大学教育振興会.
- 谷津 裕子 (2017) *Start Up 質的看護研究入門* (第2版). 学研, 211p.
- 内田 恵理・三好 陽子 (2008) 独居高齢者にペットがもたらす心理的效果. 醫學と生物學：速報學術雑誌, **157(7)**, 264–270.
- 上柿 崇英 (2014) 「自己家畜化論」から「総合人間学的本性論・文明論」へ 小原 秀雄「自己家畜化論」の再検討と総合人間学的理論構築のための一試論. 総合人間学, **8**, 213–289.
- 若松 英輔 (2019) *100分de名著 西田幾多郎「善の研究」*. NHK出版, 160p.

